



TITLE:

日食挿話 : 皆既食を前にして (日食
特輯號)

AUTHOR(S):

村上, 忠敬

CITATION:

村上, 忠敬. 日食挿話 : 皆既食を前にして (日食特輯號). 天界 1936,
16(182): 313-314

ISSUE DATE:

1936-05-25

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/167241>

RIGHT:

日 食 挿 話

皆既食を前にして

村 上 忠 敬

“日食の罐詰”

日食といふ字は元來日蝕と書くべきものである。蝕の字は蠶が桑をたべる様に蝕むことを聯想させる。和漢の古記録をみても概ね蝕の字が用ひてあるが、何時ごろからのことか間々食の字が用ひられてゐる。例へば續通鑑綱目などは殆んど食と書いてある様だ。どうしたわけか本曆にはずつと食の字を用ひ、近年になつては漢字簡易化の波に乗つて、この方が歓迎されて一般に通用してゐる様である。然し日がはゑると云ふ本來の字義からして蝕の方が正字であると思ふ。先般東京の街外れの驛頭で、美しい魚の繪が掛かつてゐるのをみて職業柄ハツとしたことがある。その中に「日食の罐詰」とあつたからだ。何のことはない日本食品會社の廣告だつた。食の話、食の研究などといふと食物のことを想はせるだけでも罪な話ではなからうか。

日食が與へる不吉感

何でも分らない事柄は神祕にみえる。原始時代には日食を神祕なものとして怖れたことに不思議はない。英語の Eclipse といふ語も多少不吉な意味を含んだギリシャ語に由來してゐる。いつも赫々として蔽ふべからざる太陽が眞晝中に虧けてゆくのをみると、現代のわれわれでも何だか不吉な様な感じがしないでもない。日本人は日食の時には井戸に毒がはいるといふので、蓋をする風習があるといふことが或る古い外國書に出てゐた。何だか今でもありそうな氣がする。

エジプトで用ひた太陽像

太陽を神として崇拜したエジプト人やフエニキヤ人、ペルシヤ人、アツスリヤ人などは太陽を表はすのに浮彫にした半球の兩側に翼を張つてゐる形が用ひられてゐる。この翼は皆既日食のときにみえるコロナに象つたものであるといはれてゐる。實際太陽活動週期に伴つてコロナの形も種々あるが、極小期のときは兩側に長く伸びたコロナが流出して全くこれに酷似してゐる。



エジプト神殿の飾



皆既日食スケッチ



注 連 縄

これに關聯して私は正月の注連縄を想ひだす。ほかの地方では多少違つてゐるようだが、私が育つた鹿児島では美しい色の橙のまわりに裏白の葉などをむすび、兩側に藁の垂れた縄をはつて門または玄関の上に張り渡すのである。その形が丁度エジプトの神殿や王の墓な

どの入口に彫つてある太陽像に非常に似通つてゐるようだ。そしてこれも矢張りコロナに象つてゐるのではないかと思ふ。

スカラベ・サクレ

エジプトの神殿の壁などにはよく甲蟲の形が彫つてある。これはファブルの昆蟲記に書かれて一躍有名になつた、糞蟲スカラベ・サクレである。スカラベ・サクレが兩脚で捧持してゐる糞の玉をエジプト人は有らうことか太陽に喩へたものらしい。尙且この蟲が太陽を食べたとき——事實この糞の玉はスカラベの食糧なのであるが——日食が起るのであると信じ、この蟲を非常に崇敬したのである。これがスカラベ・サクレ(聖なる甲蟲)なる名稱の由來ともなつたのであらう。もつともファブルは糞の玉を地球と考へてその名の起源を説いてゐるやうだ。

今夏・大阪にて大天文展覽會開催の計畫

大阪、難波にある南海高島屋の發案によつて、本協會の指導により、今夏、納涼博を兼ねて、大體的な天文展が開催さるべく、目下、本部及び本會大阪支部に於いて、種々原案・具體的計畫を協議中で、大いに天文學普及を計る豫定。